SIST15年の歩み

The fifteen years history of SIST

長山 泰介*

*NAGAYAMA Taisuke

大正6年九州生まれ。現在、勸日本医薬情報センター理事。昭和16年、東京大学工学部卒業。昭和30年国立国会図書館に勤務。その後、日本原子力研究所情報資料課長、技術情報部次長を歴任。その間、INISの設立に日本代表として参加。日本医薬情報センター誕生とともに情報管理を担当。同53年より現職。同48年よりSIST検討会、同作成委員会委員。同60年、丹羽賞功労賞を受賞。

[抄録] SIST 制定事業 15 周年を記念して開かれたシンポジウムにおける特別講演の収録である。SIST 制定のきっかけとなった NIST 構想、SIST 検討会の発足と標準化の理念、制定までの手続き、公表の要領および普及活動とその反響など、15 年間の歩みを紹介した後、SIST と ISO 規格、JIS 規格との関係を説明した。最後に現在制定されている SIST 01～10 を、論文執筆・発行、書誌要素の記述および機械可読情報交換に関する基準の三つに分け、概述した。

[キーワード] NIST 構想、SIST、ISO、JIS、標準化、機械可読情報、論文執筆、書誌要素

[Abstract] This is a record of a special lecture at the symposium held in celebration of the 15th anniversary of the enactment of SIST. The paper describes the fifteen years history of SIST, that is, the NIST plan which caused the enactment of SIST, the establishment of Committee on SIST and the concept of standardization, the process of enactment, the methods of announcement, the activity for the spread of SIST and its response of the public concerned, and so on. Then the relation of SIST to ISO and JIS is explained. Lastly, the author describes the characteristics and the contents of the present SIST 01～10 in the following three categories; standards on writing and publication of thesis, standards on bibliographic description of the items in periodicals, and standards on machine readable information interchange.

[Keywords] NIST plan, SIST, ISO, JIS, standardization, machine readable information, writing of thesis, items in periodicals

この講演は昭和 63 年 3 月 18 日(金)、東京都港区の発明会館ホールにおいて行われた、科学技術情報流通技術基準(SIST)制定 15 周年記念、「科学技術情報流通の標準化に関するシンポジウム」の特別講演を収録し、編集したものです。

はじめに

SIST の歩みも昭和 48 年に発足して以来、ちょうど 15 年になりますが、私は当初から委員として参画しておりましたので、本日は、15 年の歩みをふりかえるのに番が当たったのではないかと思います。中村幸雄先生の標準化の基本的な問題のお話の中で、この SIST がどういうことでできたか触れられましたが、私も SIST の源流というか、発足は NIST 構想にあったと思います。そこで、SIST の源流から今日までの歩み、それを踏まえて SIST の今後はどうあったらよいかを述べさせていただきます。

1. NIST 構想

SIST の源流の NIST 構想は、昭和 44 年に制定されました。基本的フレームワークを図 1 に示します。この NIST 構想は科学技術情報流通にとって非常に画期的なことだったと思いますが、これにもいろいろな批判がありました。単に構想だけではないかというような意見、なかなか実りが少ないという意見もあります。悪く言う人は、これは NIST 構想ではなく MIST 構想、霧ではないかという方もおられます。しかし、SIST が 15 年の歩みを得て一応の成果を上げることができたのも、この NIST の一つの成果として考えてよいのではないかと思います。

この NIST 構想の中に処理技術の標準化という項目が加えられ、情報の表現方法に関するもの、情報の内容分析および二次情報化に関するもの、それから情報の記録形式に関するもの、これらの標準化が科学技術情報流通にとっては重要な要件であるとして書いてあります。具体的なこととして以下の 4 項目があります。

- ① 書誌記述データの標準化
 - ② 二次情報化技術の標準化
 - ③ 科学技術用語の管理システムの確立
 - ④ 情報の発表・記述形式、記録伝達技術の標準化
- 最初の書誌記述データの標準化が、文献の流通

にとって非常に大きな問題であることは、間違いありません。2 番目が二次情報化技術の標準化。これは抄録のようなものです。3 番目の科学技術用語の管理システムの確立は現在、あまり手がつけられていないと思います。それから情報の発表・記述形式、記録伝達技術の標準化は、SIST の中でもいくつかの項目に取り上げられています。これらの項目を実施するには、標準化の実施・普及は中央調整機能を中心として、各種センター等の協力のもとに進めていく必要がある、というのが NIST 構想の中に書かれてあります。

これを具現化するのに、最初は科学技術庁が中心になって案を練り、SIST の検討委員会という形で発足したのが昭和 48 年のことです。この NIST 構想に書かれている中央調整機構というのは、一つの機構としては現在でもできておりませんが、これは科学技術庁、JICST あたりがその一部の機能を果たしているといっても差し支えないと思います。

2. SIST 検討会の発足

この基準検討委員会は、図 2 に書いてあるように、一応 17 名の学識経験者で構成され、発足したわけです。初代の会長は大塚先生でして、現在でも大塚先生はこの検討会の会長をされており、ここまで続けてこられたのも先生のご熱意のおかげだと思います。

この基準検討委員会で何をするかは最初問題になりましたが、三つのことをやると決まったわけです。第 1 が基準テーマの選定、何をテーマにするかを決めることです。2 番目が作業部会への指示とアドバイスです。この作業部会に対してどういうふうにしたらいいか、どういう方向へ持っていくかが第 2 番目です。3 番目としては、一応の基準はつくっても皆さんに基準を守ってもらわないといけない。そこで普及するにはどうしたらいいか。普及の方策を検討する、これが検討会の目的といっていいかもしれません。

昭和 48 年に発足した当初、もっとも一般的な基

構成機構	主な役割
中央調整機構	NIST整備の総合的推進、各種構成機関の総合調整
総合センター	① 共通的・基盤的文献情報の収集・整理・加工・提供 ② 専門センター等のバックアップ
専門センター	① 専門分野の情報の収集・整理・加工・提供 ② 情報の専門的分析・評価
データセンター	数値データの収集・整理・分析・評価・提供
クリアリング機構	情報源・進行中テーマ等に関する情報の収集・整理・加工・提供
地域サービスセンター	各地域における利用者への情報サービス
中央デポジトリー	文献資料の保管・提供
人材養成機構	情報専門家の養成・訓練
研究開発機構	情報科学・技術に関する研究開発

図1 NISTの基本的フレームワークと構成機構の役割

昭和48～53年

抄録作成に関する基準案
 書誌情報の記述に関する基準案
 雑誌名の略記に関する基準案
 書誌情報における機関名の表記に関する基準案
 書誌情報交換用レコードフォーマット(外形式)基準案

図2 科学技術情報流通技術基準検討会

準をつくるのにまず必要だといわれていたのは抄録の基準です。当時、15年前ですが、情報流通に対して抄録が非常に重要なウエイトを持っており、抄録の標準化から始まったわけです。

作業部会の任務としては、大体1年に一つぐらいしかできないだろう、と大変気の長い話ですが、重要なものから手がけるということで始まったわけです。2番目に手がけたのが書誌情報の記述に関すること。書誌情報というのは整合性がないと具合が悪いということがあり、2番目に取り上げられた事項です。3番目が雑誌名の略記ということです。これも非常にバラバラです。外国などではある程度のルールができていますが、日本の雑誌についてはまったく統一がとれてないというか、いろいろ問題になっていました。

それからその次が機関名。日本の中でいろいろな論文を出すところの機関の名前、これも問題が多く、このルールをつくろうではないかとなった。それから次第にデータベース化される、コンピュータ化されることが一般の趨勢となってきます。その前提として、この書誌データのレコード・フォーマットをどうしたらよいか。そういう問題が数年の間に引き上げられたわけです。約5年ぐらひは、こういうような形で毎年一つずつ取り上げ

ながら一つのSISTの案をつくって参りました。

3. 基準作成方式の再検討

ところが5年ぐらひ経つと、これに対して見直しというか、一体こういうような形で案をつくただけでいいのか、このSISTの作成方法はこれだけでいいのか、というような議論が出て、一応やり方を見直したわけです。その見直しについていちばん大きなモーメントになったのは、基準ではなく基準案という状態でのいいのかということでした。案という状態だと、これから利用される方でもそのうちに変わるかもしれないから、ちゃんとした形になってから使いたい、となかなか利用者への促進が図られないことがあります。そしてこの案を基準とすることについて手続きが必要ではないか。どういう手続きをしたらいいか。情報の取り扱い、情報機器の発展は急速に進展しており、そう何年もこの基準だけでもつというわけにはいかない。何年かごとには一応見直して、修正すべきことは修正する必要がある。そこでいろいろ議論の末、組織上の変換が行われました。

その結果、「SIST作成・普及のダイアグラム」のような案になったわけです(図3)。この案では、科学技術情報流通の技術基準検討会はそのままで、事務局は科学技術庁の振興局、そしてJICSTの中に科学技術情報流通の技術基準の作成委員会をつくり、ここで実際に作成の任にあたる。その作成の委員会の下に基準原案を作成する委員会と、修正する必要がある場合には修正する委員会、そういう二つの委員会をつくった。つまりJICSTが大部分のことに関与し、基準案をまず作成しそれを基準にする。それをさらに改定・確認する。そして普及説明会をやる。こういう組織が一応できたわけです。

この時、委員会でもいろいろ議論になったことがあります。そのいちばん大きなことは、JICST自体が二次資料の作成をしており、JICSTが基準作成の実務をやることで、JICSTに都合のいいようにつくられるのではないかという議論がありまし

た。できるだけニュートラルの性格が必要であり、JICST の委員会で作ったものは必ず科学技術庁の検討委員会で再検討する。つまりチェックの機能を検討会が果たすることが第 1 点です。それから原案の作成委員会の主査は JICST の外から出す。つまりワーキンググループにしても JICST 内の作成委員会にしても、主査は JICST 以外の人がやる。そういうような約束で発足したわけです。

その時の議論としては、この基準ができること JICST ファイルなども大幅に見直さなければいけない、それを訂正するのは非常に大変だというような議論があったようですが、現在までニュートラルにうまく機能してきているのではないかと思います。そのころ、組織の見直しと合わせて、標準化というのはどういうことなのか、という標準化の理念についてこの検討委員会でもいろいろ

議論がありました。

国際的な標準機構である ISO は、今から 60 年ほど前に国際的な機関として発足いたしました。当時は ISO といわないで ISA といっていたようですが、昭和 35 年ごろから活発に国際的な標準化が行われてきました。鉱工業に関するものが中心です。日本ではこの ISO に対応する機関としては JIS ですが、ISO で実は標準化の理念についてもいろいろな議論がありました。

サンダースという人が書いた“The aims under principle of standardization”という本がありますが、ISO のフィロソフィ、を知るのには大変いい本ではないかと思います。この翻訳が 1972 年に規格協会から出ています。こういう関係に携わっていらっしゃる方は一度お読みになるとよろしいと思っていたんですが、残念ですが絶版になったということです。

図 3 SIST制定・普及の組織と流れ

ここには標準化について、約2年ぐらいかけてISOでいろいろ甲論乙駁があったと書いてあります。その結果、ISOでは七つのprincipleをつかったわけです。これを基にして、このSISTの基準にどう取り入れたらいいかが議論になり、これを若干修正して五つになりました。これをちょっとご紹介しておきます。

1番目が「基準の作成は関係機関の意識的努力の積み重ねにより、情報の表現形式等をできるだけ共通に使えるものにして単純化する」という単純化の原則です。2番目が「基準作成は関係機関の協力により、現実に行われている、より多くの事例からその許容される共通点を求める」、つまり現在あるものから共通点を求めていくのだということです。

3番目が「基準に共通点を求める結果、場合によっては既存の方法に変更を伴うことがあり得る」というものです。これは実は大変むずかしいところです。こういうルールは、ある機関で一つのルールでやっているのをそれを変更するのが非常に困難になります。やはり初めにやる時に、こういうルールにできるだけ沿うような形をとることが望ましいわけですが、やむをえぬ場合には、ある時期に変更することもやむを得ないことがあり得ることです。

4番目は、「基準の作成にあたっては、関係者にとって無理なく容易に実現可能なもの、または使用する環境条件に変化がない限り効果的に機能するような配慮が必要である」です。基準をつくっても、だれもあまり守らないというのでは、意味がなくなりますから、無理なく容易に使えるということが必要な要件です。また使うことによって、メリットが生まれ出るようなことが必要です。

最後は「基準の作成にあたっては、諸外国の動向に留意し、国際的基準との整合性について考慮する必要がある」。国際的なものをそのままということは、いろいろ国の事情、特に日本の場合には字種の問題、カナ漢字の問題とか日本独自の状況もあります。しかしやはり国際的な整合性は一応考えなくては行けない。大体標準化の理念は以上の

ようなことで考えたわけです。

具体的には、まず基準案をつくり、その案の段階で公表して広く意見を吸収することがまず第1点です。つまり案をつくり、できるだけそれを皆さんにお知らせして手直しし、それから基準をつくる。そして検討委員会で一応基準にすることを決めるわけです。基準が決まった段階では、広く普及して啓発するという問題がございます。これはこういう基準の非常にむずかしいところです。この基準は一つの規範でして、強制力とか拘束力はないが、関係機関の理解と協力が必要です。なかなか理解が得られないということもあります。できるだけ普及の段階で理解と協力を得ることが必要ではないかと思います。

こういう基準を使用することにより、一番大きなメリットは情報流通が促進されるということです。論文を書く人たちの抵抗感はかなり強いわけですが、論文を書くという目的は、やはり広く流通して皆さんに読んでもらう。その上でその論文に対するいろいろな批判を得るということです。それに対して、できるだけ流通しやすいような方法を考えていただくことが必要なわけです。実際のSISTの具体的な作業は、前述の図3のような形で行われたわけです。

4. ISO との関連

いろいろと議論の途中での一つの大きな問題というのは、やはり国際的なISOとの関連、それから日本のJISとの関連です。ISOとの関連は、この基準検討委員会が始まった時には、日本ではこういう情報の基準についてはほとんどゼロに等しいような状況でしたが、ISOではもうかなりのものができてきており、日本は国際的にはかなり遅れているという状態でした。その後の努力によってある程度できてきたわけで、それを一覧していただくために、ドキュメンテーション関係のISOの一覧を表1に示しました。これに対応するSIST、関係するSISTが書いてあります。これを一覧すると、SISTとして対応の必要のないもの

表1 ドキュメンテーション関係のISO規格と対応するSIST

(1987年末現在)

TC 46	Documentation	対応するSIST	関係するSIST
ISO 4-1984	Documentation - Rules for the abbreviation of title words and titles of publications.	SIST05「雑誌名の略記」	
ISO 8-1977	Documentation - Presentation of periodicals.	SIST07「学術雑誌の構成とその要素」	SIST08
ISO 9-1986	Documentation - Transliteration of Slavic Cyrillic characters into Latin characters.		SIST04, 05, 06
ISO 18-1981	Documentation - Contents list of periodicals.		SIST07
ISO/R 30-1956	Bibliographical strip.		
ISO 214-1976	Documentation - Abstracts for publications and documentation.	SIST01「抄録作成」	SIST08
ISO 215-1986	Documentation - Presentation of contributions to periodicals and other serials.	SIST08「学術論文の構成とその要素」	
ISO 233-1984	Documentation - Transliteration of Arabic characters into Latin characters.		SIST05, 06
ISO 259-1984	Documentation - Transliteration of Hebrew characters into Latin characters.		SIST05, 06
ISO 690-1975	Documentation - Bibliographical references - Essential and supplementary elements.	SIST02「参照文献の書き方」	SIST05, 06
ISO 832-1975	Documentation - Bibliographical references - Abbreviations of typical words. Bilingual edition.		
ISO/R 843-1968	International system for the transliteration of Greek characters into Latin characters.		
ISO 999-1975	Documentation - Index of a publication.		
ISO 1086-1975	Documentation - Title-leaves of a book.		SIST07, 09
ISO 2108-1978*	Documentation - International standard book numbering (ISBN).		SIST09
ISO 2145-1978	Documentation - Numbering of divisions and subdivisions in written documents.		SIST08, 09
ISO 2146-1972	Directories of libraries, information and documentation centres.		
ISO 2384-1977	Documentation - Presentation of translations.		
ISO 2709-1981	Documentation - Format for bibliographic information interchange on magnetic tape.	SIST03「書誌的情報交換用レコードフォーマット(外形式)」	SIST04
ISO 2788-1986	Documentation - Guidelines for the establishment and development of monolingual thesauri.		
ISO 2789-1974	International library statistics.		

表 1 つづき

ISO 3166-1981 *	Codes for the representation of names of countries. Bilingual edition.		SIST04
ISO 3297-1986 *	Documentation - international standard serial numbering (ISSN)		SIST 07
ISO 3388-1977	Patent documents - Bibliographic references - Essential and complementary elements.	SIST02 「参照文献の書き方」	
ISO 3901-1986	Documentation - International Standard Recording cord (ISRC)		
ISO 5122-1979	Documentation - Abstract sheets in serial publications.		
ISO 5123-1984 **	Documentation - Headers for microfiche of monographs and serials.		
ISO 5127/1-1983	Documentation and information - Vocabulary - Part 1: Basic concepts. Bilingual edition.		
ISO 5127/2-1983	Documentation and information - Vocabulary - Part 2: Traditional documents. Bilingual edition.		
ISO 5127/6-1983	Documentation and information - Vocabulary - Part 6: Documentary languages. Bilingual edition.		
ISO 5127/11-1983	Documentation and information - Vocabulary - Part 11: Audio-visual documents. Bilingual edition.		
ISO 5127/3A-1981	Information and documentation - Vocabulary - Section 3a): Acquisition, identification, and analysis of documents and data. Bilingual edition.		
ISO 5426-1983	Extension of the Latin alphabet coded character set for bibliographic information interchange.		
ISO 5427-1984	Extension of the Cyrillic alphabet coded character set for bibliographic information interchange.		
ISO 5428-1984	Greek alphabet coded character set for bibliographic information interchange.		
ISO 5963-1985	Documentation-Methods for examining documents, determining their subjects, and selecting indexing terms.		
ISO 5964-1985	Documentation - Guidelines for the establishment and development of multilingual thesauri.		
ISO 5966-1982	Documentation - Presentation of scientific and technical reports.	SIST09 「科学技術レポートの様式」	

表 1 つづき

ISO 6357-1985	Documentation - Spine titles on books and other publications.		
ISO 6438-1983	Documentation - African coded character set for bibliographic information interchange.		
ISO 6630-1986	Documentation - Bibliographic control characters.		
ISO 7098-1982	Documentation - Romanization of Chinese.		
ISO 7144-1986	Documentation - Presentation of theses and similar documents.		
ISO 7154-1983	Documentation - Bibliographic filing principles.		
ISO 7275-1985	Documentation - Presentation of title information of series.		
ISO/TR 8393-1985	Documentation - ISO bibliographic filing rules (International Standard Bibliographic Filing Rules) - Exemplification of Bibliographic filing principles in a model set of rules.		

* ISBN, ISSN, 国名コードの3件は昭和63年2月1日にJISとして制定された。

** 昭和54年にJIS Z 6002「文書用マイクロフィッシュのヘッダー」としてJIS化されている。

もあると思いますが、対応したほうがいいものもまだまだあるような状態です。これを見ていただくと、おおよそのことがおわかりになるのではないかと思います。

5. JIS との関連

SIST と JIS の関連をどうするかということは、先ほど中村先生のお話もありましたが、最初は「情報」については JIS はなじまないということで、新しい SIST という形態をとったわけです。検討委員会でも、これをどう考えたらいいか、2、3 回議論になったことを記憶しております。

そこで出た意見を集約すると、JIS で扱っているものは結局物として、物と情報は若干の違いがあり、物の規格をそのまま情報にアプライすることとは問題があるのではないかと、しかしいずれ JIS

に情報の部門をつくるというような気運があり、そういうものができた段階でこの SIST と JIS の関連を考えたらいいいのではないかということになりました。そして現在 JIS と SIST が部分的に一緒になろうというような気運がつくられてきているわけです。

そこでこの SIST のフォーマットと JIS と整合性をできるだけ保つために、少なくともフォーマットだけは JIS のフォーマットにそろえるべきだというような議論になり、6 年目ぐらいから、JIS のフォーマットにつくり変えました。その後できてくる SIST は JIS のフォーマットを踏襲しています。

6. SIST 制定の変遷

現在、SIST にはどのようなものができているか、図 4 をご覧下さい。ここには今までつくられた 10 の SIST と、現在検討中の SIST-11、12 というのが書いてあります。01 が抄録作成、02 が参考文献の書き方。この 02 というのは少し変遷がありました。いちばん頭初の 02 というのは書誌事項の統一ということでしたが、いずれこの書誌事項はデータベース化されるので、データベースをもとにした基準にしたほうがいいということと、頭初の 02 では論文に書かれる参考文献と一般の bibliography と一緒になっており、どうもそれでは具合が悪いということで切り離し、この 02 は論文に書く場合の参考文献の書き方だけにしました。この書誌事項のほうは 10 で全部一括してまとめました。03 が書誌情報の交換用レコードフォーマット、これは外形形式と内形式があります。これは時間があれば後でもう少し説明したいと思います。

それから 05、これが雑誌名の略記です。06 は機関名の表記です。07 が学術雑誌の構成とその要素。08 が学術論文の構成とその要素。09 が科学技術レポートの様式、10 が書誌データの記述、となっております。これだけのものができており、ご覧になるとおり、何年か経った時点で案の修正をし、それで確認をとっています。

現在、案として二つのものがつくられていますのが、一つが数値型情報交換用レコードフォーマットです。これはなかなかむずかしい課題ですが、案としてできております。次に会議予稿集の様式。予稿集もいろいろなものが出ており、これを利用する場合に困難も多いということで、この予稿集のフォーマットを SIST の案としてやろうということです。63 年 3 月末までには案としてでき上がることになっているというのが現状です。SIST の作成というのは、この 15 年間若干の改変はありましたが、一応順調に 10 までができ、また 11 と 12 が近くできあがることになります。

7. 普及活動とその反響

いちばん問題になるのは、この SIST ができ上がった段階で、できるだけ関係する人に守っていただきたいということです。SIST の普及は大きな問題でして、この普及のためには初期には科学技術庁が担当してやっておりましたが、その後 JICST が中心になり毎年 4、5 か所で説明会を開いております。昭和 49 年～62 年の間に 21 か所で 64 回開催しました。いちばん多いのは東京で、毎年やっておりますし、それから大阪などが多いわけですが、北海道から九州、それから北陸の地方も何回かやっております。松山、高松の四国地区、それから広島、岡山の中国地区、東北では仙台、と各地区で開催しており、参加者も毎回 100 人ぐらい、延べで 5,000 人ぐらいになっております。ただ、はたしてこれでいいのかというのは問題です。

どういふ方々がこの SIST に関係するかというと、いくつかの広い層にわたっています。まず論文をつくる人、これは非常に層が広いわけですが、大学の方、研究所の研究者、これらの方は一般的には学術会議などで集まることがありますが、学術会議とも連絡をとりながら、こういう論文をつくる人たちに普及を図っています。

その次が学会誌、商業誌。学協会誌がいちばん大きなウエイトを占めるのではないかと思います。編集の実務をやっている方々の他に重要なのは、よく学協会で設けられている編集委員会の委員の方々、これはまあ論文作成者とはぼイコールですが、論文をつくる方にこの情報の流通という面から、ぜひ考えてもらいたいと思います。

それから次に重要なことは、二次資料の作成に携わる方々です。これは情報センターの方々、JICST はもちろんのこと、今、各所に専門センターができております。あるいは民間の会社、企業、その他団体でもいろいろ二次資料をつくっている方がおられますが、その二次資料の作成の方々にはぜひこの SIST を十分にご理解していただきたいと思います。

(△ : 基準案限定、▼ : 基準制定又は改訂)

基準名	年度	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
SIST 01 抄録作成		案作成	△7					案修正	▼7							案訂
SIST 02 参照文献の書き方			案作成	△9	△10			案修正	▼7			修正	▼3			
SIST 03 題名的情報交換用レコードフォーマット (外形式)					案作成	△10	△10	案修正	▼7							案訂
SIST 04 題名的情報交換用レコードフォーマット (内形式)								案作成	△7		案修正	▼3				案訂
SIST 05 雑誌名の略記				案作成	△10				案修正	▼3						案訂
SIST 06 雑誌名の表記					案作成	△1			案修正	▼3						案訂
SIST 07 学術雑誌の構成とその要素										案作成	△3	案修正	▼3			
SIST 08 学術論文の構成とその要素										案作成	△3	案修正	▼3			
SIST 09 科学技術レポートの様式												案作成	△9		案修正	▼3
SIST 10 データベースの記述												修正	▼3			
SIST 11 数値型情報交換用レコード構成 (案)															案作成	▼3
SIST 12 会議予備書の様式																案作成

図 4 SIST 制定の変遷

図 5 書誌的信息交換用レコードの3要素とその関係 (田村貴代子氏作成)

最近、情報がデータベース化されるのが一般的な傾向です。このデータベースをつくる人、それからベンダーとかディストリビュータとかいう方々もやはり関係があると思います。それからこういうデータベースに関係するシステム・エンジニアの方々、これらの方々も特に機械可読に関する部分については関心を持っていただきたいと思います。それからもう一つ忘れてはいけないのは、図書館関係の方です。図書館ではいろいろな bibliography をつくる、索引をつくるがありますが、その作業の一つの基準として、この SIST に関心を持ってもらいたいと思います。

こういうような普及説明会をやっていると、いろいろな反響があると聞いております。その中でいつも繰り返される意見があります。細かいことはさておき、そのうちのいつも出るという三つぐらいの意見を紹介いたします。

一つは SIST と JIS がどういう関係にあるのかという疑問です。これは中村先生の話、それから先ほどの私がお話したようなことで大体つきているのではないかと思います。2 番目としては、これは主として研究者の方から出る意見ですが、細かく規定することは研究者の自由な発想を妨げることになり非常に煩わしい、こういう規定については反対である、という意見もよく出るそうです。これは若干の誤解があるのではないかと思います。この基準は決してそういうようなことを制限することではなく、円滑な情報流通を図ることが目的ですので、この最低限の規範を一応示している。ところが実際につくったものになると、だんだん細かくなっていくわけで、こうして貰いたいということと、こうしたほうがベターであるということとを分けております。ベターであるというのはその趣旨だけを了解していただければよろしいと思います。

それから 3 番目としては、学会関係の方で、SIST と異なった方式でやっていて学会だけで流通するには何ら困っていないので、SIST を守る必要もないのではないかと、従来のものを変えられと逆に困るというようなご意見も出ているよう

です。

ひとつ考えていただきたいことは、現在の学問分野、あるいは技術分野でも非常に学際的になってきております。現在の一つの学問分野だけで流通していると思ったら大変な間違い、間違いといったらちょっと言い過ぎかもしれませんが……。できるだけ他領域の人にもわかるようにしてもらうということで、SIST の趣旨を了解して、学会誌などの刊行をしていただきたいと思います。学協会誌では投稿規定が一番元になるわけですから、投稿規定の中にこの SIST の考え方を導入してもらえれば大変結構ではないかと思います。

8. 機械可読情報交換に関する基準

そろそろ時間がなくなってきましたので、機械可読について簡単にお話しします。

図 5 に機械可読の外形式と内形式と書誌データと書いてありますが、この図を見ていただくと、いちばん右側が書誌レコードで、これが外形式です。真ん中が内形式と称して書誌データの内容のいろいろの指示子とか識別子が示され、それからデータ要素、書誌の中身が SIST になっております。こういうようなものについて一応機械可読情報の基準はできております。その特徴まで触れる時間はなくなりましたので、これらの特徴は SIST ハンドブックに書いてありますので、お読みいただければ幸いです。

お わ り に

最後に結びとして、15 年を振り返ってみます。

私はあまり積極的なコントリビュータというわけにはいかなかったかもしれません。この SIST の作業と普及は大変地道な活動ですが、一般には理解が困難なことです。しかし、一応着実な努力により、これまでよく来たという感じがするわけです。これは関係した人たちの熱意によるものだという気がいたします。国際的にみると、この SIST もようやく ISO のかなりの部分と対応でき

るようになり、ようやく国際的にもある程度の発言力というか、これだけ日本でも SIST をやっていますと言えるようになってきたのではないかと思います。

今後としては、一つは国際的な観点も踏まえ、やはり ISO への寄与ということ、先ほど ISO の仕組みのお話もありましたが、関係する人たちの層ができるだけ厚くなり、ISO へも日本として寄与することが必要だと思います。今、日本で貿易摩擦がいろいろ起こっていますが、情報のこういう面でも役に立てれば幸いです。昨年秋にウォーリックで開かれた会議でも、日本文献についての

関心が世界的にも高まってきてる状況が、いろいろと話に出ていましたので、日本からも寄与できることが非常に大事なことだと思います。

併せて、日本の国内での関係者に対してできるだけ理解をしていただくような普及活動も、ますます発展させていただきたいと思います。時間も過ぎましたので、これで話を終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

(文責 本誌編集委員会)